

中世文芸と小松

小松は中世文芸の豊かな舞台である。



能『安宅』の上演(金沢能楽会提供) 平成4年(1992)3月21日、石川県立能楽堂。弁慶は渡邊容之助師。

能『安宅』は、『嵯川親元日記』に寛正六年(一四六五)観世大夫政盛一座の演能が初見する。作者は未詳である。

源義経主従一二人は山伏姿で奥州へ落ちのびる途中、源頼朝の命をうけた富樫の某が関守の安宅の関にさしかかる。弁慶は東大寺再建の勧進山伏と名のる。弁慶は富樫と激しく応酬し、富樫は斬ると威嚇する。山伏一行の祈禱による示威に恐れられた富樫は勧進帳を読みと迫る。弁慶は往來の巻物を勧進帳として天も響けと読みあげる。しかし強力姿の義経が見咎められる。弁慶の義経打擲、山伏の富樫への詰め寄りで富樫を威圧し、富樫はその気迫に押され一行の通行を許す。関を離れ一行が主君の非運を嘆いているところへ、

富樫が現われ非礼を詫び酒宴となる。弁慶は延年の舞を舞い、一行を促し奥州へ下っていく。

弁慶の智勇と苦衷、富樫の覇気、義経の忍耐を演じ、緊迫感漲り劇的変転に富む能の雄編で、歌舞伎『勧進帳』など近世文芸に大きな影響を与えた。

素材は室町期成立の源義経の伝奇物語『義経記』で、安宅は「安宅の渡り



舞の本「富樫」(国立公文書館所蔵)
富樫城で勧進帳を読む弁慶



『義経記』巻七 平泉御見物の事(金沢市立玉川図書館 村松文庫)
 「判官その日志の原に泊り給ひけり。あければ、斎藤別当実盛が手束の太郎みつもりに討たれけるあいのいけをみて、あたかのわたりをこえて、祢あがりの松に著給ふ。」とある。

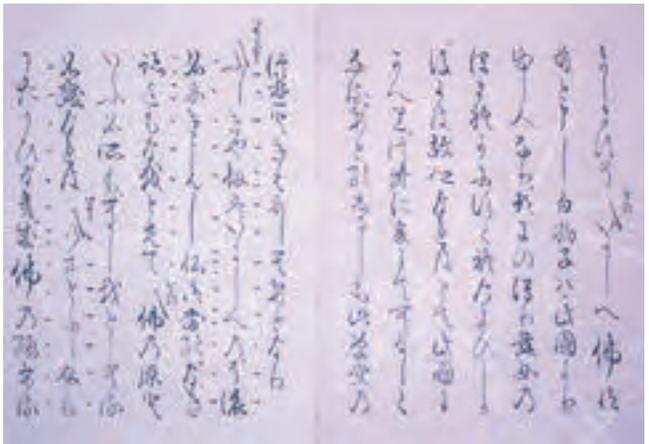
をこえて」とあるだけであるが、『義経記』が描く義経主従の北国落ちで各所で遭遇した苦難を、富樫を登場させ安宅の関に集約したものである。安宅は古代以来海陸交通の要衝で、室町期に安宅湊に関所があったことが、『安宅』の舞台になったとも考えられる。

安宅関址は県指定史跡となっている。

戦国期の幸若舞曲『富樫』では、義経主従は安宅の松に着き、童から山伏禁制の難所富樫の城があると聞く。弁慶は単身富樫城にのり込むが、人相絵図を示され勸進帳を読む。同期の御伽草子に『義経北国落絵巻』などがある。能『仏原』（別名『仏御前』）は、『春日若宮拜殿方諸日記』に、宝徳四年（一四五二）観世元重（音阿弥）の演能が記録される。作者は未詳である。

白山禪定を志す都の僧が、加賀国仏の原の草堂で里女に出合う。里女はこの地で没した仏御前の供養を乞い、仏御前の話を語り消える。僧が弔い仮寝をすると、夢の中に仏御前の霊が現われ舞を舞って消える。幽艶な作である。

典拠の『平家物語』では、平清盛の寵愛が祇王から白拍子仏御前（語り系本では加賀国のもとする）に移り、仏御前は栄耀するが、世の無常を悟り尼となり、祇王姉妹と母が隠棲する草庵を訪ね、ともに仏道に励み往生を遂げたとある。十四卷本『地藏菩薩靈驗記』



光悦本 謡曲「佛之はら」 江戸時代初期 本阿弥光悦(ほんあみこうえつ)らが共同で制作出版(個人蔵)

など、加賀での伝承からの作能も想定される。同材に能『祇王』、御伽草子『祇王』がある。(清水郁夫)